

日本新潟【長安文物瑰宝展】 展品リスト

1、名称：撫琴俑

時代：漢 級別：3級

尺寸：高さ 19.6cm、底長さ 9 cm、広さ 8.5 cm

重さ：1.5kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwA5

灰色陶製、全体それぞれ白い化粧土がついている。彩色はすでに剥落している。襟は 2 枚重ねて、広い袖の深色衣を着ており、端然と座って、両腕は折り曲げ、手を下に向け、両手は袖の中に入れている。とりわけ髪を梳り、肩の後に垂らし、端正な笑顔をしている。女俑は手の下に目視し、表情がじっとしている。手は袖の中にあるが、前腕の袖のひだから見ると、両手が琴をひいてるが分る。この作品は人物の顔の表情、手の動作と体の姿を通じて、女性楽手の一生懸命に奏樂する情景をいきいきと示している。漢代芸術品の中の素晴らしい傑物である。

2、名称：粉彩双髮拱手女俑

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 51 cm、腹径 15 cm、底径 17 cm

重さ：3.1kg

出土場所：1986 年西安市北郊機械化養鶏場出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA23

泥製赤陶。俑は手を組んで立っている、髪は高く梳り双髪を結び、穏やかな顔に赤彩が施されて、唐代流行の〔赤彩〕である。細い目で小さい口、じっと遠くを見ている様子をしている。男性用の円襟袍を着ており、腰に革帯をつけて、両手は袖に入れて胸の前で手を組んでいる。この俑は丸顔ではっきりした目をしていて、体は豊満である。立っているが体と頭をわずかに傾けて、動感のある造形をしている。姿がきれいで、鮮やかな服を着ている。唐代の墓葬から出土した女俑が男性用の服を着ているということは、唐代の女性が服装について開放的であったことを反映している。

3、名称：粉彩騎馬俑

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 35 cm、長さ 31 cm、広さ 10 cm

重さ：1.86kg

出土場所：西安市長安区 206 研究所

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA143

泥製赤陶。俑は幘頭帽をかぶり、目がくぼみ、頬骨が高く、口が大きくて顎鬚がある。折り襟の服を着て、腰に帯をつけていて、胡人のようである。胡俑は馬に乗って、前腕を上げ、両手を握って、手綱を引くようにしている。両足が馬の鐙の上にあり、馬全体は赭赤色をして、頭が天を仰いで、尻尾を挙げている。丈夫な体で、立っている姿が出発する準備しているようで、西域胡人が東方の都長安へ進発するようすを生き生きとして表している。

4、名称：楽俑

時代：唐 級別：3 級

尺寸：高さ 14.2 cm、厚さ 6 cm、一番広さ 13 cm

重さ：0.45 kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA236

泥製赤陶、彩色はすでに剥落している。踊は幘頭帽をかぶり、鼻が高く、目が大きく、胡人の特徴が明らかである。円襟が細くて長い袍を着て跪坐する。両手が演奏している様子を表現している。五官がはっきり刻まれ、印刻線で袖のひだを表している。手に持っていた楽器はもう朽ちてしまっている。唐代には伝統的な音楽と伝来音楽を吸収し、特徴的な独特の十部楽が生まれた。十部楽は坐部と立部に分かれる：坐部楽伎は堂上に坐奏し、立部楽伎は堂下で坐奏している。この坐楽俑は唐の時代に坐部伎が坐奏する情景の再現である。唐にはたくさんの楽舞を題材とする作品が残っている。その中では胡人の形象が多い。これは唐楽に胡楽が多いことを示しているだけでなく、胡伎が中国社会で活躍していたという事実を反映している。この作品は樂者が一生懸命に演奏する様子を魅力的に表現、唐代の彫刻家たちの高い技術を示している。

5、名称：粉彩御馬俑

時代：唐 級別：3 級

尺寸：上広さ 24 cm、下広さ 20 cm、高さ 57 cm

重さ：5.6kg

出土場所：西安市東郊韓森寨出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA255

泥製赤陶、元々の彩色はすでに剥落している。顔たちは豊満で、目が遠くを見ている。髪は双髪を結び、左右に分けて耳に垂らし、円襟細い袖の袍を着て、腰に包裏をつけて、短い靴をはいている。両腕を挙げ、手を握っている。女俑は体が健壯で、動作が協調し、馬を乗る前に馬の顔をじっと見ている情景をいきいき表している。唐代には女性の騎馬が流行している。当時の有名な詩人杜甫の詩に虢国夫人が馬を乗って入宮する様子ことを描いた詩句があり、考古発掘中にしばしば唐代の女子騎馬俑が出土している。この俑も唐代の女性が騎馬が好きであったことの一例である。

6、名称：胡人馭樂俑

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 61 cm、上寛 27 cm、下寛 20.5 cm

重さ：6.35kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA272

泥製赤陶、全体に白い化粧土がついている。俑は眉間にしわを寄せ、丸目、高鼻、突頬骨、上唇に兩曲山羊髭があり、口はきちんと閉じている。踊は幘頭帽をかぶり、円襟で細い袖の袍を着て、腰に帯をつけて、前衿は腰帯で絞めている。長靴を履いて、踏板上に立って、両手を握っている。右腕を精一杯挙げて、駱駝を引くようにしている、胡人の形象である。この俑は全身比率諧調、表情が堅毅、体強健、西域胡人が駱駝を引いて、シルクロードを通して、早く長安城について、早く砂漠の辛い旅が終わるように待っている様子を表している。

7、名称：八字脚武士俑

時代：北魏 級別：3級

尺寸：高さ 39.7 cm、足距 25 cm

重さ：2.75kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA415

灰陶、彩色はすでに剥落している。かぶとをかぶり、甲をまとい。長靴を履いて、方顔、巨目、寛鼻、闊口、左手が曲げて胸に挙げて、両手は盾を持って、兵器を握って、足があげて「八」という形をしている。この俑は眉間にしわを寄せ、怒目、切歯、唇を閉じて、聳肩縮頸、一つ殺気を表現された。南北朝時期、北の民族がどんどん中原に入り、政権を争う戦争がときどき有って、年絶たずで、こうしたことが考古の発掘調査でこの時期の墓葬から常に出土する武士踊をみると分る。

8、名称：粉彩騎馬俑

時代：北魏 級別：3級

尺寸：高さ 15 cm、長さ 15 cm、幅 6 cm

重さ：1.2kg

出土場所：1998年11月長安県 曲北 北魏墓出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA601

泥制赤陶俑。俑は馬体、馬腿及び踏板の三つの部分を組みたてられている。俑は小冠をかぶって、長顔、秀目、赤唇、橘赤の戦袍を着て、外に甲をまとい、左手に綱を引く、右手は物を握って、馬に乗っている。馬は頭を下げて立って、前後に楸があり、背中に鞍轡を敷いている。全体に赤、白、黒を施して、色が鮮やかである。馬の前後の腿がそれぞれ上部でつながっていて拱形を呈している。腹の部分が空いている体がその上に置いている。この騎馬俑は制作が簡練で、馬及び人物の装束は中原と異なり、北方少数民族の独特の風格を反映、当時の軍事、服装、陶塑の研究に関する重要な実物資料である。

9、名称：粉彩文吏俑

時代：北魏 級別：3級

尺寸：広さ 8 cm、高さ 28.5 cm

重さ：0.67kg

出土場所：1998年11月西安南郊長安県北

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA485

泥製灰陶。小冠をかぶって、黒い髪、目眉は細く、穏やかな表情をしていて、顎の下に髭がある。赤寛袖斜襟袍を着て、腰に黒い革帯をつけて、下に寛脚ズボンを着て、膝のしたに脚絆を巻いている。両手を胸前に抱え、左手で笏板を持つ様子である。この俑は昂首挺胸、表情は落ち着いて、北魏の文吏の姿であろう。全体造形では主に人物の顔の表情を刻まれ、体部分は簡単に表現されている。

10、名称：御手俑

時代：漢 級別：3級

尺寸：最も広さ 18 cm、高さ 31 cm、厚さ 15 cm

重さ：2.3kg

出土場所：西安市北郊十里鋪出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWA437

灰陶、彩色は大部分剥落している。俑は反縮髻を結び、目が細く、鼻が大きく、微笑んでいる、襟は2枚重ねで、長い服を着て、両腕を挙げ、綱を引くようにしている。漢代の車輛には、作戦のための戎車には立って乗るが、出行の輶車、幡車、軒車、安車と物を運ぶ輜車などは全部座ってまま乗る。この俑は髪の毛の形と服装が漢代によくみる侍従で、貴族の車に乗っている御手である。

11、名称：緑釉陶犬

時代：漢 級別：3級

尺寸：長さ 29.5 cm、高さ 26.3 cm

重さ：3kg

出土場所：1977年7月西安市東郊赤旗電機厂出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWB5

赤陶緑釉。犬が立っていて、頭が挙げて、口をわずかにあけて、耳がたって、目は遠くを見て、しっぽが上に巻いている。体に頸圈と腹帯があり、背に釉を施すが、腿と腹には釉がついてない。造形はいきいきとしている。中国漢代に氧化鉛を主な溶剤とする低温色釉は色が黄色、緑、褐色三つの種類に分けられる。その中、緑釉が一番目立ち、陶塑製品は早くは新石器遺跡に発見されている。漢代から唐代までの彩絵陶は鉛釉陶塑製品が一番すばらしく、主に陪葬に用いる。この陶犬も副葬品で、色が鮮やかで、神態が生き生きとして、漢代の典型的な陶塑芸術品である。

12、名称：緑釉陶豚

時代：漢 級別：3級

尺寸：長さ 29 cm、高さ 18.5 cm

重さ：2kg

出土場所：1988年4月7日西安市公安七拋交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gWB8

赤陶緑釉。豚は両目を開け、両耳が前に向いて立っていて、長い口をわずかにあけ、後振、歯が外に出ていて、背の毛が直立、しっぽが巻いてお尻に貼って、前足あげ、体が後に傾けて、姿は凶悪で攻撃性を示している。この豚の姿はいきいきとして、誇張した描写がみられる。形体巨大、完璧に保存されていた。漢代陶塑の芸術的風格を反映されている。

13、名称：陶牛

時代：唐 級別：3級
尺寸：長さ 25.5 cm、高さ 29.5 cm、広さ 10 cm
重さ：1.55kg
出土場所：西安市東郊韓森寨出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所
編号：3gWB119

泥制赤陶。牛の体は肥碩丈夫、頭頸が太く、短く、耳が直角で立っていて、肩や腰の張り、顎の下の垂し皮が厚くて、前胸に繋がっている。北方の黄牛の姿がみられる。この牛の体がすこし開けてある。大きい丸い目、下顎が後にひかれて、口を開いて、鼻で強く息を喘いでいる。相手に攻撃しようとしている。この作品は彫塑精美、細致入微、筋肉が力強い筋力がみえる。形態の比率がちょうどいい、公牛の丈夫で精悍な様を主に描き、敵を退散する様をいきいきと描写している。

14、名称：陶辟邪

時代：漢 級別：3級
尺寸：長さ 43 cm、高さ 23 cm、広さ 25 cm
重さ：4.3kg
出土場所：
収蔵部門：西安市文物保護考古所
編号：3gWB218

灰陶。辟邪が跪伏状をして、重心を落として足を踏んでいる姿は前に突き出している様子。大きい丸い目、眉が突く、両耳立っていて、上の唇の後部が上り、背に双翼がついている。尻尾がお尻にきちんと貼って、首の後ろに四角い穴があいていて、何らかのものが挿し入れられていたと思われる。辟邪は伝説中の神獣である。獅子のようにみえるが翼がついている、お墓の守りで、戦国時代から始まり、漢から南北朝まで盛行に行われた。この辟邪は顔が獠猛で4足は太くて、体は健状、造形簡潔、風格粗獷、漢代彫塑の簡潔な風格と誇張の芸術手法を体現している。

15、名称：三足 空薰炉

時代：漢 級別：3級
尺寸：腹径 21 cm、高さ 16.5 cm
重さ：1.77kg
出土場所：1979年西安市北郊赤廟坡針織袜二厂出土
収蔵部門：西安市文物保護考古所
編号：3gWC11

灰陶。 炉が円形で、炉身と蓋子母釘はびたりとかみあい、円腹、三つ足である。蓋の上に3角形の孔があり、表面に赤彩絵を施して、頂部に鈕が付いている。薫炉は古代に香をたく用具である。下に底座があり、上に蓋があり、蓋に鏤刻の小さな穴がある。薫炉にはさまざまな造形があり、皆蓋がついてある。ときに蓋に孔がついてあるし、炉身に孔があいている。香をたくと香煙が孔から出るので薫炉と呼ばれた。用途が三つあり:一つは服を薫蒸する。古代には香水、香料がなかった、入朝拝謁するとき、あるいは大事な親戚と友達を会うとき、必ず冠服を薫蒸するという礼儀がある。古代には服を薫蒸することが流行り、ふつうの庶民百姓がお客さんを迎えるときも服を薫蒸した。清乾隆時代から、西方の香材が中国に入り始め、薫服風俗はしだいに下火になった。第二には書屋で使っている。古代の金もちの子供が本を読んだり、文章を書いたりするとき、必ず香をたいている。香をたくと室内の悪臭い空気を排除し、人が楽な気持ちを保ち、元気になる。第三には神仏を参るときに使う。凡そ皇宮六院、古刹寺廟で使う。祖宗を朝拝あるいは神仙を礼拝するとき、経を誦んで、佛を念ずるとき、必ず香をたいて薫をつけている。室内あるいは院内には香煙裊裊、空気に回して、祖宗あるいは神仙に尊敬を表すが、また、空気を交換していて、清香、寧静、肅穆を感じる。薫炉は西漢中期から清代末年までに流行している。

16、名称：繭形壺

時代：秦 級別：3級

尺寸：腹径 48 cm、高さ 41 cm、口径 16cm

重さ：6.9kg

出土場所：1965年西安市北郊赤廟坡冶 厂出土

番号：3gwC39

灰陶。壺口がわずかに外に広がり、頸が抑えてあり、腹部が扁円で蚕繭に似ている、圈足が外に出て、頸部と圈足に弦紋があり、腹部に縦向弦紋がある。この器の胎土は精細で、細砂が入っていて、高温で焼いてある。伝説によれば繭形壺は敵を防ぐ。繭形壺を地に埋めて、口を地上に出しておくと、敵兵が馬に乗って攻撃してくると、陶壺の中で音が響いて、壺の口から敵兵の走っている声が聞こえる、そして方向が分かれる。しかし、文献と考古発掘資料によれば、繭形壺は主に日常生活に用いて、御酒を入れる物であった。

17、名称：赤陶獸塔式罐

時代：唐代 級別：3級

尺寸：腹径 34 cm、高さ 39 cm、口径 7.5cm

重さ：4.4kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gwC120

泥製赤陶。罐は丸口、頸が短い、肩と腹の部分が丸鼓、腹の下が抑えて、平い底である。罐の肩に六つの花葉紋という模様を刻まれ、その茎がそれぞれ腹に楕円のように巻いてあり、六つの楕円の中心部に鋪首が環をかむと獸首を飾ってある。この罐の蓋鈕が三段を分けて、上小下大、下の部分が花の模様を飾ってある。佛塔の宝刹と似てる。三節罐は仏教の影響で盛行された新型の随葬器物の一つである。すばらしい構想をたてて、独特な造形で、全部彫塑の手法で創造の意境を表現された。よく見える彩絵の方式と全然違うである。獸首と獸面鋪首は中国の古典芸術によく見える創造題材であり、吉祥と避邪の意味が含まれた。このような三節罐はめずらしいで、あまりないである。中外文化が相互に吸収して形成された芸術気象が含まれてある。

18、名称：十二字瓦脊

時代：漢 級別：3級

尺寸：広さ 10.4 cm、長さ 43.7 cm、厚さ 8.7cm

重さ：3kg

出土場所：1974年西安市西北郊六村堡公社東柏梁大 出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gwD43

灰陶。瓦脊は長方形で、正面の辺框の中に2行の篆書陽文が刻まれ、右縦から：‘延年益寿、与天相待、日月同光’十二字の吉祥銘がある。字の底がきれいに磨かれ、字体の結構が適当である。筆画が円挺秀美、すばらしい漢代の書法芸術作品である。この瓦脊は漢の建章宮遺跡の「秦液池」の旧址に出土され、この宮殿の建築の瓦脊として使用された。

19、名称：朱雀紋瓦当

時代：漢 級別：3級

尺寸：直径 15cm

重さ：0.85kg

出土場所：1978年4月西安市西北郊漢城遺址原家堡出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gwD18

灰陶。表面に平彫された朱雀が飾ってある。造形が簡潔で、頭、頸、軀、翅、尾、足が全部弧曲線で繋がって、外框の円形と適応された。翅羽は五の弧線で短いから長いまで排列で表現され、韻律感、動感を形成された。この芸術の処理は簡約、拙朴、

線、面の組合が自然し、いきいきとして表された。朱雀は四神の一つであり、南を象徴してある。

20、名称：虎紋瓦当

時代：漢 級別：3級

尺寸：直径 19.3cm

重さ：0.9kg

出土場所：西安市文物商店移交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwD41

灰陶。表面に虎が刻まれてある。双翼がついてあり、曲頸弓腰、昂首舞爪、大頭丸目、闊口利歯、頸が大きくて、丈夫な身体であり、四足が健だし、長い尾を持ち上げてある。虎の頭、頸、肩、腹、尻、尾及び体にある斑紋が全部に簡潔の弧線で刻まれ、虎の雄健と威猛を表された、漢代の虎紋の中の經典の作品である。全体の造形が円形で、虎の威勢が豊に表現されている。虎は四神の一つであり、西を象徴している。

21. 名称：虎紋瓦当

時代：漢 級別：3級

尺寸：直径 19.1cm

重さ：1.2kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwD266

灰陶。表面に龍が刻まれてある。双翼をもち、鱗身脊棘、頭が大きくて長い、吻尖、鼻、目、耳が皆小さい。目眶が非常に大きい、眉弓が高くて聳えている。歯が強い、前額が前に突いている。顎に長い鬚がある。独角、頸が細い、腹が大きい、尻尾が細くて長い、尾梢が三角形をしている。足が三趾で、全体が短い、太くて大きい。四足が強壯である。この紋飾が円形で龍が懸命に走る様子を表現している。非常に写意的と動感を表された。龍は四神の一つであり、東を象徴している。

22、名称：龍紋空心磚

時代：秦 級別：3級

尺寸：長さ 118cm、厚さ 19.5cm、幅 37cm

重さ 80kg

出土場所：1952年西安市北郊

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwD39

灰陶。磚の表面に一つの玉壁紋を飾っていた。玉壁に一对の葉形の雲紋があり、下に芝草が刻まれ、両側にそれぞれ一匹の回首龍がある。体が長く、張齒舞爪、呼風喚雨のように表現された。龍の上にそれぞれの芝が対応であり、龍に足に下に一对の葉形の雲紋がある。磚の左右両端にそれぞれの小龍が刻まれた。画面の流れているような雲紋、いきいきとしての芝草と吉祥如意を含んである長龍が、全体の画面たっぷりで整然されており、龍紋の図案が刻画細膩、形神兼備、張齒舞爪、両目、威勢を表現された。龍は中華民族の象徴であり、中国人は龍の伝人と思われる。早くは原始社会に、凶勝の龍は推崇と神化され、封建社会になると、最高統治者皇帝の象徴としている。皇帝は龍の化身で、至高無上。この龍紋空心磚は皇帝の建築材料に用いるだと思われる。

23、名称：玄武空心磚

時代：漢 級別：3級

尺寸：長さ 114.5cm、厚さ 38cm、幅 19.5cm

重さ 80.15kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwD397

灰陶、長方形である。正面と両立面にそれぞれ一組の亀蛇が互いに争い姿を浮き彫りされた。亀は大きくて前に爬行して、蛇は亀に縛れた。この図は玄武紋とも呼ばれた。画面全体がたっぷりけど乱れない、多くけど散らさない。線條が流暢、いきいきであり、吉祥の意義が含まれた。この空心磚は建築裝飾磚で、玄武が北を代表ので、この磚は建築の北に飾られたと思う。

24、名称：三彩文吏俑

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 89cm、幅 21cm

重さ 10.3kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwE197

俑は文官帽をかぶって、顔が満月のように、眉目が清秀として美しい。自然で優美である。棕色緑辺の重ねる襟の長袍を着て、袖が広い、両手が胸に抱いて、対座に立っている。足尖が裙の外に露出され、身体挺拔、氣質非凡。頭と頸の下から黄、緑、

白三彩釉を施され、胎は白にしている。芸人を彫塑するとき、写実の手法で、現実の人物をモデルして、懸命仕事する文官の姿をいきいきとして刻まれた。

25、26、名称：彩絵胡装女俑

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 64.5cm、高さ 64.6 cm

重さ 5.9kg、6.2kg

出土場所：西安市長安区出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwA700、3gWA701

泥製赤陶。二つの俑が立ってて、顔を見ると中原の漢族仕女を分る。一人は胡高い毡帽をかぶって、窄袖に折り襟の長袍を着て、腰に帯をつけて、帯に小さいバックをついている。高い靴をはって、手が物を託するように平く挙げている。もう 1 人は双螺髻を結んで、服装は同じで、両手が半分胸に挙げ、足が平板に踏んでいる。二つの俑は全体がそれぞれ赤、緑、白などの彩を施す、毡帽に幾何の模様を描かれ、顔が穏やかである。眉は墨で描かれ、唇は朱を塗る、顔に赤いチークをつけて、端麗で品があり、華麗な胡式長い袍を加えて、身支度の優雅な光景を写した。当時の宮廷の貴族婦人の姿を表現された。当時の唐帝国は対外開放政策を行われ、いろいろ文化を吸収し、このような背景に唐代の婦人は相対の自由をもらって、禁制が少なくなってきた。思想も開放し、社会に婦人を岐視の封建観念が薄くなってきた。政治舞台、社会活動、文化分野、スポーツ等に婦人の姿が見える。女子は単身が”踏青、したり、馬を乗ったり外出することなどができる。女子が胡服を着て、胡帽をかぶっての事が当時の長安城に流行っていた。服飾が胡化することが外来文化を吸収する表現している。唐代の墓葬に出土された彩絵胡装女俑は、この歴史の写照であると思われる。

27、名称：方形獸面磚

時代：唐 級別：3級

尺寸：長さ 43.3cm、幅 33cm

重さ 11kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwD294

泥製灰陶で、長方形である。正面の周りに連珠を施され、中に一つの獸面を浮き彫りされた。両耳がたってて、太い眉、方目、寛鼻で、口を開けている。 齒吐舌、両側の鬚が上に巻いている。威勢の姿が生き生きと表現されている。これは現実でない、想像する化け物である。大きい耳が天上地下を聞こえるし、両目が千里が見える、

雲雷霧電を通して、妖邪を除ける。宮建物の装飾磚を属する。建築物に挟んで、庭院を飾る。また「屋宇守り」できる。この装飾建築磚は模印で作られた。即ち、まず泥坯で画面を作って、彫刻し直してから最後に窑に入れて焼いて上がる。胎質が強く、造形が生き生きとしている。製磚の技術から見ても、獸面の造形芸術から分析しても、唐代国家の強盛統一、経済文化発達などに密接な関係あると分る。その宏偉な気魄、猛々として表された。興旺発達の一つの時代精神を体現している。その同時に屋宇の建築事業が高峰時期に達したと反映された。

28、名称：白釉大罐

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 42 cm、口径 14cm、底径 16.3cm

重さ 9.9kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gcc116

罐口が巻いてあり、頸が縮んで、腹が鼓起、底が平いており、全体に白釉を施す。

白瓷は中国伝統的な瓷器の一つである。鉄量が低い瓷坯を使って、純淨の透明釉を施して焼いて上がる。白瓷が早くは東漢に出現した。隋唐まで普通になった。もう調査した北方地区に白瓷を生産する窑址は河北内邱邢窑、曲陽窑；河南巩県窑、鶴壁窑、密県窑、登封窑、邙県窑、陽窑、安陽窑；山西渾源窑、平定窑、陝西耀州窑、安徽蕭窑などある。その中に邢窑の白瓷の白い程度を対して、要求が高いである。だから胎瓷の粗い部分にまず化粧土を施す、焼い上がてからの白い程度をあげるためである。中、晩唐になると、大体すでに高い品質の坯料を使っている。だから瓷胎に化粧土を使っていることを減りになってきた。その精品は体薄く、釉潤、光潔純淨の程度に達しました。

この白釉大餡罐は形体が大きいし、釉の色が潤澄し、唐代の瓷器の中に非常に珍しい物である。

29、名称：茶葉末釉瓶

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ 21 cm、腹径 16cm

重さ 1.25kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gcB99

侈口、唇が巻いている。頸が長い、腹が球形で、平底、通体に茶葉末釉色を施す。

底に釉を施さない、刀を削る痕が残っていた。茶葉末釉色は中国伝統的な結晶釉の一つの種類である。その釉面が失透状をしていて、釉の色が黄と緑が混せて、茶葉の細末と似てる。その形成機理は釉の中に鉄、鎂と硅酸結合してからできた結晶である。茶葉末釉瓷器は唐代から始め、当時の耀州窑でたくさん作られた。器の形が 壺と小壺二種類がある。この器は唐代耀州窑の物で、その造形は同期の窑に作られたほかの茶葉末釉器と違い、非常に素晴らしいです。

30、名称：白釉葫芦瓶

時代：唐 級別：3 級
尺寸：高さ 28 cm、腹径 20cm、底径 11.4cm
重さ 1.7kg
出土場所：
収蔵部門：西安市文物保護考古所
番号：3gcB34

小さい斂口、頸が縮んで、腹が突いている。外撇式圈足、圈足に二つの対称する小さい孔があり、整体が葫芦状をしている。白い胎、通体に白釉を施す、釉の色が青い、細かい碎の開片がある。元は中に朱砂があるが、今朱砂が別の所に置いてある。この器の瓷製が細かくて堅い、形が奇特で、保存が完好である。盛唐の瓷器に素晴らしい精品の一つである。

31、名称：青釉四系罐

時代：唐 級別：3 級
尺寸：高さ 27cm、口径 13cm
重さ 4.6kg
出土場所：
収蔵部門：西安市文物保護考古所
番号：3gcc118

白胎、釉の色が青いけど黄色が見える。直口、方唇、丸肩、腹が突いてあり、平底。肩に復式四系を置いて、上と下に2周の弦紋を彫塑された。四系青瓷罐が漢唐時期に流行され、器物の特色が直口、腹が突いて、底が小さいであり、造形が鶏頭壺と似てる。肩部に貼花と拍印网格紋などを飾っている。東晋、南朝に体型がもっと高くなり、肩部に飾って立橋形四系が多い。南朝に四系肩部に大体蓮瓣紋を刻まれ、隋代になると、罐身が細く長い。腹の部分に一つの弦紋を突いてあり、南朝の蓮瓣装飾を代わっている。唐代の器体が線條が和諧、また高低が違う、式様が多い、腹の部分が上大きい、下抑える状態になる。

32、名称：提梁卣

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 34cm、腹径 28.5cm

重さ 7.45kg

出土場所：1976年西安市長安区西周遺址出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA50

卣体が扁円、外置式子母蓋、蓋頂がもりあがっている。花苞形握手、腹が扁円、上に提梁があり、下が高圈足である。腹の両側に皆饕餮紋を飾って、腹の上部に四匹夔龍紋を飾って、一周をまわっている。足に扉棱で四つの夔龍紋を飾っている。両端が獸面で、内底に「父辛」二字の銘文がある。

卣は古代に酒を入れる器皿である。その基本的な形状が楕円形で、腹が大きい、頸が細い、蓋があり、圈足、側に提梁がある。そのほかに筒形、方形、鳥獸形などの形製がある。商代の早期に出現され、晩商と西周の早期に盛行してる。卣は宋代の定名である。文献と金文によると、卣は専用の秬鬯で作って香ありの酒を入れる祭器である。この青銅提梁卣の製作が精緻し、図案が富麗、西周青銅器に珍しい精品である。

33、名称：象足獻

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 43.5cm、口径 26.2cm

重さ 6.25kg

出土場所：西安市鐘樓保管所

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA52

獻体の上と下が合鑄、甑が大きい、鬲が小さい。甑の腹の下を抑え、鬲が袋形で三足がある。侈口、両耳直立、口沿の下に二つの弦紋があり、中に七つの餅形の飾りがある。底の内の一つを置いて、の中に十字形の孔があり、線に三つの巻いた雲を刻まれ。下に三つの足が設けた。それぞれの足に象の首を飾って、そして足の真ん中に突いて範線が鼻になる。両耳が後抿、目勾眉、足が口の中に出す。この器の形体が大きい、渾厚凝重、造形が優美、紋様簡潔、西周の炊食器に精品である。

34、名称：銅罍

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 33cm、口径 20.5cm

重さ 5.6kg

出土場所：西安市北郊大白楊征集

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gtA89

侈口、束頸、鬲形の腹、獸首鑿、三柱足、左右に沿って二つ対称する菌状柱を設けられた。罍は商周時代の酒器である。大きいのは酒を入れるもの、小さいのは酒を飲む器、また酒を温められる。爵の形体を似てる。普通は3足、2柱、1鑿で、円口、平底あるいはちょっと突いてる。無流無尾。少数の方体円角もあり、4足が付いてる蓋がある罍、また腹部に分けて、鬲の形状をしてる罍もある。青銅罍が二里頭文化時期から出現初め、商代と西周早期に盛行される。

35、名称：環帶紋鼎

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 42cm、耳径 38cm、足径 15 cm

重さ 15.54kg

出土場所：西安市長安区 西出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gtA224

鼎の腹が僅かに膨れて、両耳が少し外にゆがめて、下に三つの獸面蹄形足が繋がる。腹の上部に窃曲紋を飾り、下部に環帶紋を飾る。鼎は古代に食を炊く器である。烹煮あるいは魚肉を入れる時に使うもので、祭りと宴会のときに使う。三足、両耳、一定の深さの腹腔が基本的な結構である。形は円形が多い、方形四足鼎、扁足鼎と鬲鼎などもある。陶鼎が新石器時代に出現され、商周及び漢代に主に随葬明器に用いた。青銅鼎が二里頭文化時期に出現され、商周時期に一番流行して、ずっと漢、魏時期まで。鼎は青銅礼器の中に主な食器で、奴隸社会に「明尊卑、別貴賤」、即ち権力と等級の象徴である。文献記載と考古発掘によると、西周時期列鼎製度が存在してる：天子が九鼎を使う、諸侯が七鼎、卿大夫が五鼎、士が三鼎か一鼎を使う。当然に奴隸製の瓦解に従って、鼎を用いる製度が絶えずに変わるが、鼎の数の多少が墓主人の身分高低を判断する重要な象徴である。この器の造形が宏偉古朴、沉着または凝重、紋飾りが神秘感がある。

36、名称：饗饗紋壘

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 60.5cm、底辺長さ 16.3cm

重さ 9.5kg

出土場所：西安市公安局交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA143

壘体方形、口が方形で、少し外にゆがめて、腹が方形、肩の下を少し膨れて、腹の下が抑える。高い方圈足、口、腹、足の辺縁及び辺の中部に皆一つの扉稜がある。肩部の真ん中に二つの対称する浮き彫り獣面と獣首耳を飾って、耳、口、肩、腹の上部及び足辺に一对の鳳鳥を飾る。鳳鳥が高い冠、尖る口、翅羽が上に伸びて、尾がおりて垂らし、大きい爪が直立、腹の下部に蕉葉紋を飾る。鳳鳥が辺扉稜と中部扉稜を軸として、両両相対、饗饗紋をなる。壘が古代に酒をつくる青銅器で、商代に始まって、西周に流行している。この壘の形が大きい、紋飾が雄麗、鑄造工芸が複雑で、西周青銅器の中に上乘傑作である。

37、名称：銅匜

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 15cm、長さ 27.3cm、幅 13 cm

重さ 1.1kg

出土場所：西安市長安区 西馬王出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA152

長い流、浅い腹、口と流が瓢の形をしている。後ろに環形鋳あり、鋳に龍の形をしている。下に四つ蹄形の足が設ける。鋳に龍の首がある。太い眉、丸い目、両角が外に伸びて、両耳が後振、大きい口が沿を含んで、尾が匜の底に繋がる。口沿と流の一周に変形勾連夔龍紋を飾って、腹部に三つ弦紋があり、足に夔龍紋を飾っている。内底に二行の銘文を立てて書かれた。この匜が形体が大きい、造形が典雅、紋飾が整然としている。歴史、芸術価値があると考えられる。

38、名称：饗饗紋爵

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 21.1cm、最大口径 15cm

重さ 0.9kg

出土場所：1995年西安市公安七処交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA259

長流、尾が尖って、獣首鋳、帽形柱、刀形三尖足。腹の上に両組の饗饗紋を飾っている。雲雷紋が底紋になる。鋳の片側柱帽の下に銘文（族徴）がある。この爵の流がちょっと厚い、両柱の位置が早期の流口曲がるところからわずか後ろに移され、腹がちょっと深い、わずか垂らした。爵はお酒を飲む器で、商代に重要な礼器の一つである。この爵と同じ出土される有名な「臣諫簋」、「叔口父」卣などの青銅器もある。

39、名称：方鼎

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 23cm、口長さ 18.2cm、口幅 15 cm

重さ 3.15kg

出土場所：1995年西安市公安七処交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA257

長方形、耳が直立、沿が平折り、直腹、平底、四柱足。腹に毎側の中部及び各角に一つの扉稜があり、下に沿って一周の蛇の紋を飾り、蛇の頭が三角形で、円目が突いており、体が曲がって、鱗節がある。四面両側及び下部に三行の乳釘紋を飾って、中部に菱形勾連紋、四足に饕餮紋を飾る。内壁一側委角方框に銘文が立って五行を書かれた。この器の造形が典雅、紋飾が凝重和諧、非常に芸術価値がある。

40、名称：環帯紋方壺

時代：西周 級別：3級

尺寸：高さ 49 cm

重さ 13.1kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA221

長方形、直方口がわずかひかけている。腹が抑えて、高方圈足、蓋がある。口沿と圈足にそれぞれ一つの弦紋があり、腹の中部に四つの弦紋があり、頸の下に一周の環帯紋をまわっている。腹部の弦紋の下に変形四方の螭虺紋を続いて飾られ、足部に螭虺紋を一周に飾っている。頸部の両側にそれぞれ鋪首が環を含んでいる模様を飾っている。蓋が長方形で、上部が倒圈足のようにしている。側面と頂に螭虺紋が飾っている。蓋側と器の口に銘文が飾る。この壺が渾厚凝重、紋飾が精美華麗、鑄造工芸が高超、非常に文献価値と芸術価値がある。

41、名称：矛

時代：戦国 級別：3級

尺寸：長さ 29.3 cm、広さ 4.2cm

重さ 0.4kg

出土場所：1973年西安市北郊大白楊庫征集

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtF47

通体が広扁及び直である。鋒尖が鋭利で、表面に三つの があり、突いた尺骨が少し短くて、一面に円孔があり、蓋が楕圓形をしている。中に空っぽである。矛は直刺と扎挑に使う長兵器で、中国古代に使う時間が一番長い兵器である。一番早い矛が木棒を削って、尖っているもの、その後に尖石片、あるいは獣骨を竹木端に縛っている石矛、あるいは骨矛が出現された。商代に時に骨矛が出現した。湖北の黄坡商前期遺址に出土された柳葉形銅矛が今まで発見された。商晩期になると、銅矛がだんだん多くなり、双釳式あるいは双孔式及び簡単な銘文が多いである。西周に矛がだんだん狭くなって、春秋晩期に直刃釳及び矛葉中部の窄体矛が出現した。戦国晩期の窄体矛が、 に両刃が突いて、血槽になった。秦代に銅矛の矛体が広扁及び直である。両面に血槽があり、短い釳、鋒端まで中に空っぽである。戦国に鉄矛が出現始まった。東漢まで、全部銅矛に取って代わる。鉄矛の矛体が銅矛より大きいそして重い、もっと鋭利である。唐代になると、矛と騎兵が専用の長柄矛一稍（槊）は重要な長柄兵器で、唐以後に矛が銃を多く呼ばれて、種類が多いで、軍に必要な利器である。

42、名称：青銅劍

時代：戦国 級別：3級

尺寸：長さ 52.3 cm、広さ 5cm

重さ 0.8kg

出土場所：1973年西安市公安七処

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtF190

劍体が狭長い、鋒尖が鋭利、中に があり、劍格が厚くて、格の上に饕餮紋があり、丸い茎、茎に二つの箍があり、円餅形の劍の首である。劍が古代人がいつも付けていた兵器で、自衛と擄殺のときに使う、尖頂が鋭利、刺戮ができる。そして側刃を使って、砍殺もいいし、近く戦い実用兵器である。商代に青銅劍の鑄造が始まった、西周時期青銅劍がもう流行していた。劍体の普通の長さが 20-30cm、ヒ首のような形をしている。春秋時期に青銅劍が発展して、長さが 50cmに超えた。劍身が修長、製作が精緻である。歩兵、騎兵に普通に使う武器である。その他、その時に劍を付けるは等級身分を表され、だから銅劍の長短、重さと品級にとって非常に考究である。ある劍が彫刻された玉を飾っている。漢代以後になると、劍が全部鉄製になり、劍身が長くなる。この劍が出土された墓葬と劍の自身の長さから見ると、戦国時期の秦国兵器に属している。

43、名称：四神十二生肖鏡

時代：隋 級別：3級

尺寸：直径 22cm

重さ 0.9kg

出土場所：1983年西安市文物商店移渡

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtB79

円形、円鈕、円鈕座。座内に八字の銘があり「光正随入、宜新長命」、字の間に円点を隔てる。内に四神（青龍、白虎、朱雀、玄武）が四方によって配置され、この間に亭閣、神山などを飾っている。外に双線で十二格を分けられ、格内にそれぞれ一つの生肖を置いた。外区と線の間一周の鋸齒紋をまわる。線がやや広く、素面。辺に稜がある。四神が四霊と呼ばれ、即ち青龍、白虎、朱雀、玄武が中国古代伝説中の四方（東、南、西、北）の神で、四方天地の精である。十二生肖は古時に十二地支を配合する人の生年を計る十二種類の動物である。即ち子鼠、丑牛、寅虎、卯兔、辰龍、巳蛇、午馬、未羊、申猿、酉鶏、戌犬、亥豚。四神と十二生肖が器物の飾り紋様を使われ、邪を避けて、吉祥の意がある。部局が整然、紋様が精美で、唐代銅鏡の精品である。

44、名称：葵花形対鳥鏡

時代：唐 級別：3級

尺寸：直径 27.5cm

重さ 2kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtB280

葵花形、半球形鈕である。後ろの近縁の所に一周まわされた凸弦紋が紋飾を内外二区に分けられた。内区の左右にそれぞれ一つの鳥が花枝に向かえて立っている。上部に一束の佩飾りがあり、二つの鳥が向えて飛んで、下部に一花草が咲いてる。その間に浮んでいる雲が飾って、外区に一周の花草紋を飾っている。この鏡が唐代にやや流行する形で、工芸と紋様が結構精緻で、盛唐に精美の作品を属している。

45、名称：三犀鼎

時代：商 級別：3級

尺寸：直径 27.5cm、耳高さ 6.6cm、高さ 36cm

重さ 5.65kg

出土場所：1974年西安市北郊大白楊庫征集

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA22

直耳、敞口、縮頸、鼓腹、足の上部に空っぽで乳状している。頸部に六つの扉稜

がある。毎部分が一つの夔龍紋があり、腹に三つの部分に分けられ、毎部分が獣面である。長い角、広い耳、目が突いてる。鼻が大きい、 齒咧口、牛首を如く。商周時代に青銅器に牛首紋を装飾するのが普通である。当時のたくさんの器物がこれを装飾紋様としている。青銅器によく見えた饕餮紋がこの牛首として獣面である。牛が畜牧業に重要な地位を占めている。人たちの生活食物の重要な出所。これも古代部落あるいは氏族のトーテムしるしである。凄腕前の神秘能力がある。祭り活動の犠牲である。「太牢」と呼ばれた。このような紋様の青銅器が上等なものである。三犀鼎の特点が明らかである。立体浮き彫り牛首、はっきりしている。形神を兼ね備える、顔つきが獐猛だ。標準的な商代晩期の器物である。

46、名称：鳳鳥紋方座簋

時代：西周 級別：3級

尺寸：座辺長さ 22 cm、高さ 26cm

重さ 6.6kg

出土場所：1995年西安市長安県西周禮鎬遺跡出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA256

口が大きく広げて、円腹、圈足、下が方座を繋がる、腹両側に鳳鳥形の耳がある、口沿の下に四匹の鳳鳥紋が一周に回っている、間に扉棱を隔てる。鳳鳥が丸い目、尖った口、高い冠、後ろを振り向く、尾が上に巻いている、圈足が変形窃曲紋、座四面にそれぞれ鳳鳥が六匹を飾る、一周にまわっている。中央に長方形がある。中に紋飾がない、通体が雲雷紋が地をととして、三層の紋様を形成している。内底に銘文を書かれて、三行十九字：唯九月堆鴻叔从

王員（鼎）征楚荊在

成周誨作宝簋。

堆鴻が人の名前で、叔が排行である。「員」が鼎で、計画と求める意味がある。「誨」が諫誨である。「尚書・説命論」“朝夕納海、以輔台徳”によって、諫言を聞く意味がある。銘文の意味が：王が成周で群臣を集まって、楚荊を征伐する事を検討して、鴻叔が述べた征伐の策略を王に受け入れられた。堆鴻叔がこの功績を記念するため、宝簋を鑄造して、銘文を加えている。この墓に出土された他の文物及び堆鴻叔簋の特徴から見ると、銘文の“王”が西周康王を推測している。この墓が陝西省文物管理委員会が1981年冬に西周禮鎬遺跡の間の花園村辺りに発掘され、その同時、他の墓葬と車馬坑数個を発掘された。出土された堆鴻叔簋の墓形が“丁”形である、この墓で出土された青銅器のほかに、銅器、漆器、玉器などがある。堆鴻叔簋が二つを出土され、形製が基本的に同じで、ほかの一つは座が破損して、その銘文に製作人が「堆鴻」をはっきり記載された。

47、名称：蟠螭紋銅劍

時代：春秋 級別：3級

尺寸：長さ 30.2 cm

重さ 0.28kg

出土場所：1980年西安市北郊大白楊庫征集

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtF46

劍体がやや短い、身がやや広く、中に一筋が突いてる。刃部が鋭利、劍柄の格、茎、首が一体に繋がり、全部浅い浮き彫りされた蟠螭紋がある。蟠螭の目がもともと松石を挟んで、もう剥落した。劍は古代に斬殺と刺殺を使う兵器である。劍身と劍把、二つ部分を構成する。劍身の前端の尖る部分が“鋒”と呼ばれ；中央に突いた稜が“脊”と呼ばれ；両側の斜殺が“从”と呼ばれ；从両面の刃が“鏑”と呼ばれ；合“首”と両“从”を“腊”と呼ばれ；劍身と劍把の間の護手が“格”と呼ばれ、また“鐔”と呼ばれ；手で握る円形あるいは扁形の劍把が“茎”と呼ばれ；茎末端の円形物が“首”と呼ばれた。青銅器が古代貴族と戦士が自衛の兵器である。西周早期に流行始まって、春秋晩期から戦国時期までもっとも盛行である。漢以後に青銅器がだんだん鉄劍に変わっている。短劍が“匕首”と呼ばれ。春秋兵器がもともと出土少ないで、この劍が形製独特、装飾華美、今まで出土された各種類の劍に同じ造形がまだいない。

48、名称：錯銀鳩杖首

時代：漢 級別：3級

尺寸：長さ 7.2 cm、高さ 8.5cm

重さ 142g

出土場所：1967年西安市北郊大白楊庫征集

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtD45

杖首が鳩鳥形、立ってる。元気で後ろを振り向く、覗いて上を見る。巨目勾嘴、長い尾、長い足、曲げて座に伏せる。座が長方形柱、柱が管状である。下に杖を付ける、固定の作用をしている。上に錯銀紋飾が羽を表す、体形が小さいけど、精美で華麗である。鳩杖首が古代老者が杖の頂端の飾り、鳩鳥である。《後漢書・礼儀志》に書いた：“仲秋之月、県道皆案戸比民、年始七十者、授之王杖……八十、九十、礼有加賜、王杖長九尺、端飾鳩首”。《王杖詔令簡》(武威出土)：王杖“上有鳩、使百姓望見比于節”。故王杖が鳩杖も呼ばれた。その時、杖を賜るが一つの礼節と表彰するである。漢代に杖を賜れる人が特権を享受する。自由に衙門を出いれ、

道の側でも歩け、汚すがだめ。杖の端に鳩鳥を飾っているが意味がある。《後漢書・礼儀志》に書いて：“鳩者、不噎之鳥也、喻老人不噎”。鳩鳥はのどにつかえてない鳥である。杖の首に飾っては吉祥の意味がある。老人は飲食が楽になって、のどにつかえてないで、健康長寿を保つ。そして、“鳩”と“九”が同じ発音で、古代に二つの字が通じる。また、九が個位で最高の数字で、独特の意味がある。無数とも呼ばれる。非常に高い、非常に多い、非常に長い、非常に大きい意味がある。漢代の墓に出土が多く。老人は鳩杖を使うが普通であることを表された。

49、名称：鎏金羊灯

時代：西漢 級別：3級

尺寸：長さ 23 cm、高さ 29cm

重さ 3kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gtA223

羊が伏せる状態で、通体が素面鎏金、角長くて巻いてる。前方を目視し、尾が短い、足が腹下にぐるぐる巻いる。後ろに長方形の口と蓋がある。蓋が柳接である。開閉できる。蓋を開けて羊に頭に置いて、灯盤になる。灯は人たちの生活に欠かすことのできない照明用具である。銅灯が“鐙”あるいは“錠”である。古代に鐙あるいは錠と呼ばれる。灯が春秋に紋様が多い、西漢にも流行している。形態がさまざまがある。羊形灯が中に一つの造形である。“羊”と“祥”が通じて、“吉羊”は“吉祥”の意味もある。羊が吉祥物として尊ぶ、そして吉祥と多福の意を求める。漢代に羊形の灯が流行し、羊形の灯のほかに、羊形の石鎮もある。銅洗に飾る図案も羊である。題銘文は“大吉羊”である。鎏金羊灯、腹が空っぽで、蓋を開けて、頭に置いて、形もそのまま、神態が自然、丈夫また優美である。線條が韻律感がある、ぴかぴかで、一匹の神羊が光明を“載せて”ように人間に来る。李尤が《金羊灯銘》に“金羊載耀、作明以続”をほめたたえる。この鎏金羊灯は形態が大きい、製作が優美である、河北省滿城中山国王劉勝の墓に出土された一つものがこれの大小、造形と同じである。漢代の王級館員しか使えないものが分かる。

50、名称：玉人等

時代：秦 級別：3級

尺寸：玉圭長さ 8.28 幅 2.42；玉障長さ 21.3 幅 6.6 高さ 2.3；女玉人長さ 7.5 幅 1.7；男玉人長さ 7.02 幅 1.63；獸紋玉璜長さ 11.5 幅 2.5；玉琮長さ 5.14 幅 4.64；玉伏虎長さ 11.5 幅 4；玉璧直径 4.67

重さ 1079.5g

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gy206

玉人：2件。①体扁平、偏髻を梳る。面部に五官と鬚が描かれ、腰に帯をつけ直立の状態の男像。②体扁平、面部に五官が描かれ、腰に帯をつけ、直立の状態の女性。

玉圭：頂尖下方、圭は天子、百官諸侯が盛大な儀式を行うときに使う礼器。東の神を祭るに使う、そして諸侯の間に仇を調節にも使う、天子が女を招くとき使う穀圭である。

玉琮：扁体方形、素面紋様がない。玉琮の用途がたくさんある。《三礼》及び漢儒の説明によると、礼を祭るときに地を祭る場合がある；剣尸の場合は腹部に置く、朝聘に諸侯がこれを持って君夫人に献上すること。今の人たちがその形状及び紋様によって天地を通じる法器と思われる、トーテムである。そして祈祷師が神霊を通じる工具である。

玉獸紋璜：獸が両面に刻まれ、口長い齒が着突く。耳が後ろに向いて、両面に刻まれた。璜が古代貴族朝聘、祭り、葬儀、招集する玉製礼器である。

玉璧：円形、中に一つの小さい孔、素面である。その用途が複雑である。大体いくらの種類を分けられる：一つが祭りに使う器である。天を祭り、星を祭り、神を祭り、海を祭り、河をまつりなど；二つが礼器、礼天を使うあるいは違う身分を表す記しである三つが佩系である；四が分銅を使う衡である；五つが邪を避けると尸を腐ってないに使う。

玉璋：玉圭の半形である。頂が斜め辺である。鋭い角をしている。一つの礼器である。南の神を祭り用、及び天子が視察、山川を祭りと諸侯が女を招く。

玉虎：扁平片状、虎が歩行する状態をしている。口が巨大、鼻が大きい、菱形目、耳が後ろに向いて、尾が上に巻いている。陰刻細い線で両面に頭、目、鼻及び前後ろ足を刻む。玉虎が“六瑞”の一つで、西の神を祭りである。

51、名称：青玉璧

時代：秦 級別：3級

尺寸：直径 11.08 cm、孔径 5.66cm

重さ 97g

出土場所：1983年西安市文物商店移交

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gy233

璧が褐黄色、土を浸す痕がある。璧

が円環形で、内外辺縁に凸稜がある。内に谷紋を刻む、両面紋様が同じである。玉璧は中国で新石器時代が出現してから、歴代に非常に尊ぶ、精工琢製作である。その用途が複雑である。大体いくらの種類を分けられる：一つが祭りに使う器である。天を祭り、星を祭り、神を祭り、海を祭り、河をまつりなど；二つが礼器、礼天を使うあるいは違う身分を表す記しである三つが佩系である；四が分銅を使う衡である；五つが邪を避けると尸を腐ってないに使う。

52、名称：龍形玉佩

時代：戦国 級別：3級

尺寸：長さ 7.35 cm、幅 5.5 cm、

重さ 43g

出土場所：1978年西安市戸県春秋戦国墓出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gy236

龍体が扁平、低い首状をしている。上吻円、下吻内勾、短い角。龍は体が曲げて、尾が巻いている。腹の下に足が一つである。龍の体に谷紋を飾っていて、鱗甲を表す。整体が陰刻で辺縁を刻む。腹の下に小さい孔がある。繫ぐ用である。龍が中国古代の芸術品にいつも見える題材である。この玉佩は造形が緊密で平均している、多いけれども乱雑ではない、淳朴そして簡潔である。整体が完全で欠けるところがない。

53、名称：玉蟬

時代：漢 級別：3級

尺寸：長さ 6 cm、幅 2.6 cm、

重さ 17.5g

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gy254

白玉が青いがさす。蟬体が扁平、両目が突いてる。口が尖る、双翼である。古人が蟬が蛹になって土に潜り込む。そして壳を脱ぐ梢の飛んでいる。天に上げ地に潜り込む才能がある。また壳を脱ぐ生き返る異霊で、神虫を見られる。だから口に蟬を含んで、死者が蟬のように生き返るが祈る。この蟬は彫刻手法が簡潔、刀鋒が鋭い、玉の色が潤い、細かいである。漢代の玉蟬に精品である。

54、名称：銀薫球

時代：唐 級別：3級

尺寸：直径 5.4cm、

重さ 61g

出土場所：1965 年 5 月西安市三兆出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gj100

円球形、通体が透かし彫りで、編む状忍冬紋をしている。主体が上と下二つの半球が差し押さえて作り上げる。継ぎ合わせるところに一つの小型卡軸を付けて、そのほかの部分の部分が差し押さえの緊密の子母釘を製作している。結合が堅固で、開閉が便利である。下半球の内に二つの同心機環と一つの香盃がある。各部件が相対称の活軸を器壁に繋がる。同心と活軸を利用して機械のバランスを作って、焚香盃は球体がいくら動いても状況にバランスを保たせる。設計が非常に精美である。この器がずば抜けている工芸と科学技術を結合する傑作で、唐代の金銀器の中に極品と呼ばれる。

55、名称：海棠形鴻雁花鳥杯

時代：唐 級別：3 級

尺寸：高さ 3cm、長径 13cm、幅径 10.2cm

重さ 120g

出土場所：西安市城建局基建工地出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gj298

杯の口がわずか開けて、杯壁斜めに抑える。器身と圈足が皆海棠形である。錘鏤して形になっている。花紋が平らである。紋様で鎏金を飾っている。杯心が蓮瓣の形で、楕円を構成する。中に五つの如意の雲紋があり、その間に二匹のサカツラガンが旋回する。二つの雁が雲に飛ぶ図案を構成する；杯の内壁に一周の如意形雲を回って、口沿の内に破式海棠紋をしている；外壁の每曲鑿に折枝花とコウライウグイスをそれぞれ飾られた。コウライウグイスの形態が違う、非常にいきいきとしている。上と下に一周に蓮瓣を飾っている。この杯は紋様が精美で、線條がなめらかである。そして花を刻むところに金メッキをした。金色にピカピカ輝く、華麗でりっぱであり、非常に素晴らしい。

56、名称：銀舍利

時代：唐 級別：3 級

尺寸：高さ 3cm、長径 13cm、幅径 10.2cm

重さ 120g

出土場所：西安市城建局基建工地出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gj298

鍍金で形になった。鍍金の紋様を飾っている。棺の上に蓋があり、下に座がある。蓋が頂の形をしている。体が長方形に近づく。蓋と体の子母釘である。座が二層の段階の形をしている。整体は一端が高広い、もう一端が比較的に低狭い。即ち一端が大きい、一端が小さい、上が大きい下が小さい、収分がある。通体が鑿刻で紋様を飾っていて、紋様に金を貼っている。図案は釈迦牟尼が涅槃する場面である。盒に一つの料瓶を置いていて、中に不規則の黄色の舍利子がある。舍利子が梵語の音訳で、骨の身の意味である。仏家の屍身を焚化してから残っている骨を指す。この器は做工が完璧で、図案がいきいきとして刻まれ、線條が自然すらすらとしている。紋様にある鍍金がもっと華麗でりっぱである。佛教を研究する重要な資料だけじゃなくて、比較的鑑賞する価値がある芸術品である。

57、名称：浮き彫り龍紋供灯

時代：唐 級別：3級

尺寸：高さ143cm、径23cm

重さ537.5kg（含包装箱）

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：3gs大61

青い石である。供灯が柱形で、柱、座が二つ部分に分けている。柱の頂部は直径が柱径より大きい皿の形である。柱の身に一つの雲にある堂々たる蟠龍を彫刻された。龍が柱に曲がりくねった。一つの爪が天を託して、一つの足が土を踏んでいる。龍首が見下ろし、眉をねじって怒った目であり、口を開けて歯が見える、口が耳の後ろに広げる。長い鬣毛鬣が頸の後ろから胸の前に回っている。通体がいっぱい鱗片があり、足爪が勁健有力である。龍体の周りにゆっくり昇る瑞雲がある。柱の紋様が彫刻優美、刀法が細かい熟練で、紋飾りが整って豊満である。龍の勇猛と雄壯を表された。リズムと韻律感に富む。それは精美的な唐代の石刻芸術の傑作だけでなく、石灯を研究する発展史に珍しい資料もある。

58、名称：鳳鳥龜座陶俑

時代：西漢 級別：3級

尺寸：高さ54cm

重さ5.4kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwB225

灰陶。鳳鳥が亀の背に直立している。鳥の首が上げて、円目、勾喙、口に物を含んで、頸が立ってる、両翼が背の後ろに抑えている。両足が亀の背に直立していて、尾が背の中心にくっつける。亀は四爪が地に伏せて、長い首は甲壳から出て、後ろに向けて、背に立ってる大鳥を嚙もうしている。その形は食を捜す鳳鳥が亀の背に降りて、首を伸びて、新しい物を捜そう。踏まれた亀が重い背負えなく、後ろに向いて、その鳥を追い出そうが描き出した。取材が独特で、手法が簡潔、いきいきとして、意趣に富む。

59、名称：陶鐘

60、時代：漢 級別：3級

尺寸：幅 14cm、高さ 54cm；幅 10.5cm、高さ 15.5cm

重さ 0.95kg、0.45kg、

出土場所：1979年西安市赤 坡 袜場

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gwF56、3gwF60

灰陶、二件の鐘の形が同じ。一件は鐘の上に甬が置いて、もう一つは長方形の条状鈕が置いている。鐘の前後に各二組の乳釘紋があり、毎組に三列で、毎列に三個がある。鼓部が素面である。鐘は古代の打撃楽器である。普通青銅で作られた。西周に出現され、その以後歴代に製作された、清代まで、いつも祭り、宴、樂舞の時に使われる。西周から春秋戦国までのいくつかの大型墓葬にいくつ組の青銅の編鐘が出土され、鐘を持つは当時に身分地位の徴である。戦国以後、陪葬の冥器が流行し始めた、即ち竹、木あるいは陶土で墓主の生前にある部屋やまた物を模型を作って、棺と一緒に墓に入れた。宋代以後に紙で冥器を作った。この二件の陶鐘が墓主の生前にある銅鐘を真似て作られた、専門的に陪葬の冥器である。

61、名称：跽座陶俑

時代：秦 級別：2級

尺寸：高さ 66cm、座長さ 43cm、座幅 36cm

重さ 20.9kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：2gw12

泥製灰陶。俑が跪く姿でいる。頭の後ろに髻を巻いている。丸い顔、表情が穏やかである。襟は重ねて長い袍を着て、広い肩広い袖で、背に彩絵がある。両足が跪く、両手が両足の上に置いてた。彫刻技法が簡練し、写実性が強い、いきいきと

して態度である。面部、姿の込めて製作を通して、下男の丁寧で誠意の性格を描き上げている。強烈な芸術感化力を感じられる。このような種類の俑が大体馬屋の中に出土され、馬を飼う人の形象。

62、名称：緑釉陶望楼

時代：漢 級別：2級

尺寸：高さ 136cm、座長さ 40cm、座幅 28cm

重さ 48.85kg

出土場所：西安市南郊吳家墳出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：2gw13

望楼が三層を分けて、楼閣式である。底辺が長方形で、楼閣の三層に斗拱を設計して、頂が四角攢尖式、がある。各層に窓と門があり、そして回廊を設計している。上にさまざまな形態の人物がいる。望楼が回廊、窓門、斗拱、瓦件、屋角、正などを皆芸術な処理をしている。屋と屋角を跳ね上がるは楼閣の輪郭の優美的曲線を強化してる。この楼の斗拱が一つ斗の三昇式である。結構の作用で、また装飾効果がある。このような高層楼閣の出現が漢代の建築工芸がもう一つの新しいレベルを達することを表している。後世の高層楼閣建築がこの基層の上に発展した。この楼は造形が優美、形態が高い、做工精細、東漢じきの彫塑ももう非常に高いレベルを達します。

この望楼は東漢の貴族地主家丁が遠く見渡す、監視するため、また家を保護するための建築で、比較的の高い歴史と建築芸術価値がある。

63、名称：彩繪人物車馬鏡

時代：秦 級別：2級

尺寸：高さ 66cm、座長さ 43cm、座幅 36cm

重さ 20.9kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：2gw12

顔を見る鏡である。円形、丸い釦座、釦は三輪覆瓦紋。鏡の背に赤、緑、白、黒四色の彩繪を飾って、図案が内、外を分かれた。内に緑を塗って、そして雲水蔓草を引き立て、四本の草花を描く。外に朱色を地として、車馬人物を描く、その間に林木花草を飾って、何か物語のこを感じた。彩繪銅鏡が比較的に少ないで、この鏡に出行、狩獵、酒を飲むなどの絵画題材を装飾して、独特の風格を持っている。漢代の社会生活を研究する真実的材料である。

64、名称：三彩宅院模型

時代：唐 級別：1級

尺寸：高さ 16.1－18.6cm、長さ 15.5－20.4cm、幅 9－12.9cm

重さ 7.8kg

出土場所：1995年西安市長安区 沼郷出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：g111－119

三彩宅院模型は九個の部屋模型を組み合わせ、わずかに相違がある。この模型は典型的な古代庭院で、門、堂、後室がある。両側に東西正房があり、その中の大きい、両側の小さい。具体的な造型が四式を分けて：門が懸山式、両側に山墻がある。中に門があり、下に長方形板がある；後室が懸山式で、その前に四本の明柱を置いて、中に一つの門があり、下に長方形板がある；大きい正房は二個がある、懸山式、山墻と後墻を設けて、その前に二本の明柱を置いて、下に長方形板がある、屋上に皆簡単な瓦とを裝飾して、緑釉を施す。他の部分に白い護胎釉を施す。胎が白い、質が硬い。

院に侍従がいる。そして鶏、鴨、犬、豚、駱駝などの家畜、家畜がある。侍従が3人、頭に幘頭帽をかぶって、両手を胸のところで合わせて立て、円襟の長い袍を着ていて、腰に帯をつけている。鴨、4匹、造型相違、あるいは立つ、あるいは伏せる、あるいは左右を見回す。犬、3匹、皆しゃがんで伏せる、頭を片側して遠くを見る。鶏、一匹、首を伸ばして立って、時を告げる様子している。豚、3匹、あるのが立って、あるのが伏せる。駱駝、一匹、行走状、低頭して院内に草を探している様子である。人物と動物俑がみなに白い胎で、黄、緑、褐単色釉あるいは彩を施す、色が鮮やかで、いきいきとして活気に満ちている。

65、名称：三彩虎頭帽武士俑

時代：唐 級別：1級

尺寸：高さ 87cm、底幅 34cm

重さ 14.1kg

出土場所：1984年西安市東郊田王村出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：g大10

俑は立っている。頭に虎形の兜をかぶって、虎の顔が獐猛である。口を開け歯を現す。虎の口に武士の顔を現す、武士が眉をねじって目を開け、高い鼻大きい口、朱を塗る。唇の上に八字の鬚があり、肩に披膊があり、鎧を身に付けて、円形護胸、内に狭い袖のシャツを着てる。右手を腰にあてる、左手を胸の前に握る。円頭靴を履いて、方形の台座に踏んでいる。通体に褐、緑、白三彩を施す。全身比例

が平均している、表情が勇猛である。

66、名称：粉彩鎮墓獸

時代：唐 級別：1級

尺寸：高さ 84.5cm

重さ 23.6kg

出土場所：1988年西安市東郊韓森寨出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g大7

泥製赤陶。獸の両角が額にある、くねくねして上に上がる；両耳が頭に立つ、両耳の間に鬃毛が聳え立て平たい状態をしている。眉の骨が高く突き出て、丸い目が突いている。広い鼻大きい口、両側にむき出したきばが現して；肩に両翼があり、胸が前について、腹が内に抑えて、山形座に座っている。怖く感じた。唐代の鎮墓獸の造型は芸術の創造と誇張がある、もっと神秘不思議になった。整体造型に頭と顔を強調し、そして比例の整えを注意している。この鎮墓獸は形体が大きい、凶悪な面備え、手足の筋肉が隆起して、両翼が開く、勇 と捕らえよう神態をしている。

67、名称：粉彩人面鎮墓獸

時代：唐 級別：1級

尺寸：高さ 56.5cm

重さ 24.7kg

出土場所：1991年西安市東郊秦川機械場出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g大45

泥製赤陶。もともと施した彩絵がもう剥落した。人面獸身像で、かぶとをかぶって、かぶとに三蛇がからみつく、宝塔を備え立っているようである。眉がねじって、目が突いてる、鼻が上に向いて、顎が前に伸びていて、口にむき出しきばを現す。体が獸身畜蹄である。肩に両翼があり、前足がまっすぐに伸びた、後身が底板に座る。毛と髪を皆黒墨で塗る、胸の前にもともと彩絵貼金の図案があるが、残念だけど大部分がもう剥落しまった。この鎮墓獸は凶悪な顔、造型が誇張し、墓葬の中に邪を避け、亡を保護する作用がある。考古発掘に大きい、中形の唐代墓葬にたまにこのような種類の陶俑を出土されるが、体がこんな大きいことが珍しいである。

68、名称：粉彩貼金天王俑

69、時代：唐 級別：1級

尺寸：高さ 80cm、厚さ 22cm、幅 34cm

高さ 95cm、厚さ 23cm、幅 32cm

重さ 14.3kg、15.3 kg

出土場所：西安市東郊韓森寨出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g 大 16、g 大 17

天王が濃い眉毛に大きな目、大きい口を閉じて、顔に怒る様子を満ている。戦かぶとをかぶって、かぶとに孔雀を彫塑している。孔雀が頭を片側して横目で見ると、尾が上に巻いている。俑が両 鎧をかぶって、明光鎧、戦甲獣首、膝まで伸びて、首に護襟があり、胸部に円形護鏡がある。帯を腰胸の間につけて、腹の下に釦状広帯を結んで、下部の戦裙が風を受けてひらひらと揺れている。足に靴を履いて、片手が腰にあてる、片手が曲がってわずかあげて、足が小鬼を踏んでいる。その他は高さがさっきに説明した俑と大体同じで、かぶと幅だけがわずか相違がある。天王は陶製で、もともと身に彩絵と貼金があり、長年を経て大部分を脱落しまった。

70、名称：三彩天王俑

時代：唐 級別：1 級

尺寸：高さ 63cm

重さ 4.7kg

出土場所：西安市北郊養鷄場出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g 大 36

天王俑は眉がねじって、目が突いてる、頭に戦かぶとをかぶって、かぶとに孔雀を彫塑している。明光鎧を身に付けて、虎口に吞肩甲があり、肩に披膊があり、中に戦袍を着て、足に靴を履いている。右手を腰にあてる。左手を握る。右足が直立、左足が曲がっていて、一つの夜叉を踏んでいる。夜叉は全身が裸で、左手が地をついて、筋肉が膨張してあがきの状態をしている。天王の勇猛氣勢と夜叉の凶悪な顔をいきいきとして表された。通体に黄、緑、白三彩を施す、色が鮮やか、明るいである。

71、名称：粉彩翼獸

時代：漢 級別：1 級

尺寸：高さ 39cm、長さ 55cm、幅 19cm

重さ 8.4kg

出土場所：1991 年西安市東郊出土（灊橋）

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g 大 40

獣が頭を上げて元気である。両耳を後ろにすぼめて、首の後ろに鬃毛が直立、脇に翼が二つある、長い尾が垂れて、四足が曲がって伏せる。通体に白い化粧土がある、彩絵がもう脱落しまった。この獣の造型が怪しくて不思議である。古人が随葬に使う、邪を避ける意味がある。

72、名称：五尖瓣皿

時代：唐 級別：1 級
尺寸：口径 14cm、足径 6cm、高さ 3.4cm
重さ 108kg
出土場所：1985 年西安北郊火烧壁出土
収蔵部門：西安市文物保護考古所
番号：g57

皿口が五瓣花の状態、尖状の花弁、胎質が白細、内と外に釉を施す、釉の色が白いに青いがさす、圈足が刀に削られた。外底に“官”がある。その当時に全部 33 点“官”を付いて皿を出土された。外底に皆“官”という字を刻まれ、これは釉を施してから焼かない前に刻まれた。これらの瓷器は胎が薄く、瓷化の程度が高い、つやつやして透明である。柔らかくて滑らかである。圈足が刀に削られたが、あるのは外壁に直す痕がある、足に近いところに釉がやや厚い、流釉の“涙痕”がある。圈足に砂が付いて、北方定窯の作品を属す。定窯の作品は瓷土が優良で、質が細かい、成型が安定している。そして邢窯が発展の基礎に発展した。晩唐五代に定窯で焼かされた瓷器が非常に熟練に達した。この皿は造型が典雅、製作が精巧、胎質が細かい、釉の色がむらなくて跡がない、やさしく玉の如くである。唐代の匠たちの極高な製作技術を表す。

73、名称：勾連雲雷紋大鼎

時代：西周 級別：1 級
尺寸：口径 66.7cm、高さ 85.5cm
重さ 85.2kg
出土場所：1973 年西安市長安区新旺村 鎬遺址
収蔵部門：西安市文物保護考古所
番号：g 大 1

器形がやや大きい、立ってる耳、方形な唇。腹がわずかふくれて、やや深く。下に三柱足があり、耳の外側に一組の夔龍紋があり、腹の外の紋様が上と下を分けられた。上部分の一周が腹に三分の一を占めて、六つの扉稜が外壁を六つに分けている。内に相對の夔龍を飾られ、一周に回っている。腹の下壁の三分の二に勾連雲雷紋である。形体が雄大、紋飾が精美で、時代に珍しい器物である。西周の時期にこ

のような精美な大鼎を作られる事が時代の背景と鑄造工芸の発展と関係ある。鼎は青銅礼器に主な食器である。奴隸社会に“明尊卑、別貴賤”、即ち権力と等級の徴である。文献記載と発掘調査によって、西周時期に鼎を列する制度が存在する：天子が九鼎、諸侯が七鼎、卿大夫が五鼎、士が三鼎あるいは一鼎をつかう。もちろん奴隸制の崩すに従って、鼎を使う制度が絶えずに変わる。しかし鼎をつかう数量が一貫に墓主の身分の高低を表す重要なレベルである。勾連雲紋大鼎が新旺村に出土され、西周の京都の所在地である、その当時の貴族が祭り、友達を招待する重要な器物である。このものの出土が当時の礼制を理解するために大切な実物の資料を提供された。

74、名称：錯金銀勾連雲紋銅鈇

時代：西漢 級別：1級

尺寸：腹径 61.5cm、通高さ 61.5cm

重さ 29.4kg

出土場所：1964年12月16日西安市西関南小巷出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g大39

鈇体が高い重厚である。わずかに方形をして、直口、短い首、深い腹、圈足である。肩と腹がはっきりな分界線がない。腹の上に対称する環を含んでいる鋪首を飾られた。器身の表面に錯金銀の勾連雲紋をいっぱい飾って、部位によって紋飾が変わる。口沿に一周の勾連雲紋をはさんで飾られ、首と腹部に皆大型な斜方格勾連雲紋を飾っている。紋飾の間に一つの中軸線を形成していて、左右にある花紋が対称している。圈足の四面にも対称する幾何形勾連雲紋があり、巧妙な構想、心を込めて設計、紋様をきちんと飾られ、一つの精美な芸術実用器である。この精美な銅鈇と同時に出土された銅灯、銅薰炉と銅 などもあり、埋蔵地が漢代の上林苑遺址の範囲にある。出土場所と埋葬遺跡から見ると、これらの銅器が宮の器物だと思う。当時に戦争で不安な状態で、逃げるために慌しい埋蔵した。1964年までに出土された。だから、これらの錯金銀勾連雲紋銅鈇等が西漢の皇家器物だと推測された。

75、名称：玉高足杯

時代：秦 級別：1級

尺寸：口径 6.2cm、足径 5cm、高さ 15cm

重さ 309g

出土場所：1976年西安市西郊車張村出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g14

玉の材料が青い色をしている。局部に褐色沁がある。杯が円形で、上広い下小さい、中に空いて貯蔵できる。腹の外壁に柿蒂紋、勾連雲紋と弦紋を飾り、下に短い梶棒と覆皿式的な短い足。今まで一番早い、そして秦代に出現された唯一の高足玉杯で、玉杯の発展史上に非常に重要な地位を占めている。

76、名称：玉豚

時代：西漢 級別：1級

尺寸：長さ 13.5、11.8cm、高さ 5、3.3cm

重さ 503g、529g

出土場所：1988年征集西安市南郊三門口出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

編号：g15、g16

玉豚は一對があり、走る状態をしている。長い唇、小さい耳をびったりと背中にくっつけている。小さい尾が尻に貼って、体態が肥満、四足が短い。一つの豚は前両足が前に飛び、後両足が力いっぱい地を踏んでいる；もう一つの豚は前両足が勢いよく走って、後両足が回収していて、すごい勢いで走る姿を現す。玉豚が商周にたまにあるけど、この以後に無くなった。漢代から唐代にまた出現した、特に兩漢から魏、晋、南北朝に一番盛んである。漢魏の玉豚は色がきらきらした潤いで、つるつるしている。形態が豊富、いきいきとして、非常にかわいい、漢代にめったにない芸術珍品である。

77、名称：跪射俑

時代：秦 級別：1級

尺寸：高さ 166cm

重さ kg

出土場所：秦俑坑

収蔵部門：秦俑博物館

編号：002532

この俑は一種類の跪いて射撃する重装歩兵俑である。二号兵馬俑坑の東端の歩兵俑方陣の中に、このような陶俑が 160 個があり、方陣の中心にある。跪い姿の重心が安定して、力がかからないで、中心を狙いやすいし、目標を射りやすい。そして立ってる射撃する姿より目標が小さくて、簡単に敵方からの矢を射られないである。守衛あるいは設伏するときと比較的に理想的な射撃姿の一つである。秦俑坑に出土された跪射俑は中国古代歩兵俑の戦術動作のいきいき図鑑である。

78、名称：將軍俑

時代：秦 級別：1級

尺寸：高さ 166cm

重さ kg

出土場所：秦俑坑

収蔵部門：秦俑博物館

番号：002747

高級軍吏俑とも呼ばれる。発見された秦俑坑の中に等級が比較的に高い軍官俑である。一、二号兵馬俑坑に今まで全部で7件を出土した、その中に5個が彩色の鱗細かい甲衣をはおっていて、2個が袍を着ている。皆鷓冠をかぶって、足が方口齊頭大趂尖靴を履いて、乗る戦車にいつも銅俑鐘、鐘跡などの古代作戦に使われた指揮器物がある。塑造が普通の俑よりやや精美。將軍俑がつけて兵器が主に剣である、考証によって、その官階があるいは郡尉、都尉一級である。

79、名称：蒜頭形瓷壺

時代：漢 級別：3級

尺寸：口径 3.5cm、底径 19cm、高さ 28cm

重さ 2.2kg

出土場所：

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：3gcB93

小さい直口、口の下に一つの小さい平沿がある。沿の下が突いて、上に四個弧形の豁口があり、蒜瓣と似てる、下がだんだん抑えて、長い首、首の間に二つ突いて弦紋があり、腹がはれて、圈足である。肩腹の上に弦紋、波紋が付いてる。通体に青い釉を施す、姜黄色がさす、腹下に醬赤色がさす、釉が比較的に薄い、胎釉がしっかりと結びつかないで、脱釉がある。この罐は中国に早期の瓷器で、造型がきちんと、印紋がはっきりしている。その裝飾技法と造型芸術は原始瓷と印紋陶の遺風がある。漢代の瓷器の焼製が非常に高いレベルを達した、特に釉料の配製を熟達に掌握する。青い瓷と違う色釉瓷器で、中国陶瓷釉彩裝飾の新局面を創始した。

80、名称：王鬲

時代：西周 級別：2級

尺寸：口径 18cm、高さ 13cm

重さ 1.5kg

出土場所：1978年4月陝西省眉県出土

収蔵部門：西安市文物保護考古所

番号：2gt19

広い斜縁が外に折、束首円肩、腹がはれて、三足、足が獸蹄形をしている。足と相対する腹部の上に一つ扉稜があり、上腹の一周が重環紋で、下腹に二つの凸弦紋があり、口沿に銘文がある。鬲が古代の烹飪器で、お粥を炊く用である。陶鬲が新石器時代に出現された。青銅鬲が商代早期に出現され、その形製が大きい口、袋形腹、襠を分けて、下に3個の短い錐足を付いている。西周中期以後、形製が変化した、広い沿、浅い腹、体型が横広い。春秋戦国まで、ただ足が高くなった。戦国中期になると、鬲足が低くなって、あるものが蓋が付いて、環耳を置いて；そして大小が相次いで、鼎を列する如くである。